

**「修了生が語るアックティブシニアの生き方」
～修了論文に基づく理論と実践～**

**「茶の湯」と「茶道」
～次世代に送れる幸せ～**

2016年6月3日

RSSC第5期専攻科修了

小村晴美

はじめに

室町時代に栄西により中国からもたらされた「お茶」から始まった「茶の湯」を千利休を経て「茶道」として大成し、外交・社交に欠かせない日本独特の芸術文化として世界の誇れるものとなっている。

歴史の大河を遡る時、「茶の湯」を彩る世界には幾多のドラマがあり、幾多の人物に愛好され造られた技術品の数々がある。

それを間直に眺め扱い触れることは、心を豊かにしてくれる。これからの我々には、例え名も無き一腕であろうと、造形の中に心を宿し、次代に送れる幸せをかみしめる。

(修了論文概要より抜粋)

I. 千利休没後「茶道」の行方 ～利休の後継者達～



- (1) 少庵
- (2) 道安
- (3) 古田織部
- (4) 細川三斎
- (5) 織田有楽
- (6) 七哲

Ⅱ. 「茶道」の安定期

- 徳川幕府の中央集権的な政治の確立
- 町人の間にも茶の湯が盛んになった
- 利休の嫡孫千宗旦及び子息らが“**侘び茶法**”を説き、“**侘び寂び**”の完成。千利休の精神
- 三千家の発祥と繁栄。茶芸の伝授形式が成立し、家元制が確立
- 三千家とともに多くの流派が誕生、発展

Ⅲ. 伝統文化への道

～「茶の湯」と「茶道」

- 主人は茶を点て、客をもてなす
- 人間関係と精神的 content と芸術的意義を含めそれを表現しうるものとして「茶道」がある
- 一碗の茶を点て、主客の交わりの最たるものとするために生れた融合性である
- 芸術的、哲学的、宗教的、道徳的に一体
- 社交、儀式、厳しい修行の展開茶道
- 利休は、単なる「茶の湯」の平易な従来の解釈を「道」に直結させ、茶道として大成

IV. 現代に生きる茶の湯①

～「茶道」としての稽古～

1. 禅
2. 道具
3. 点前座の準備



V. 現代に生きる茶の湯②

～家元制度と趣味のサロン化～

- 膨大な茶道人口に支えられている茶の湯茶道の世界、家元の果す役割、社会に対する啓蒙。国際に向けて日本文化を世界の檜舞台に紹介出来る「茶の湯」
- 日本全国にある家元制度は完全な組織的管理機構として存在し生き続けている。統制権、道具、装束、点前については、勝手に用いても改変する事もできない。
- 創作、改訂は家元だけの権限である。こうした家元制度が現代の茶の湯の隆盛に繋がっているとされている。諸外国からの来客を接待できる用意がある。代表的な茶室「待庵」国宝にはその空間が今も生きる

VI. 『RSSC茶の湯同好会』概要

1. 名 称:「RSSC茶の湯同好会」
2. 組 織:会長1名・副会長2名・世話役若干名
3. 入会者:初心者・経験者等同好者
4. 研究会:月1回程度の講義とお稽古
5. 発表会:春と秋に格好の場所でのお茶会
6. 会 費:研究会・発表会とも実費・均等割り
7. 発 足:平成26年3月・「RSSC同窓会」に加盟

発起人ご挨拶

「茶の湯」と言うと敷居が高いと思っはいませんか。日本独自の芸術文化の宝庫です。健康長寿一役カテキンたっぷりのお抹茶、見てよし、味よしのお菓子。

現代の忙しすぎる生活、都会の喧騒から逃れ、静寂の中でしばし味わう心の安らぎ、亭主と客「一期一会」の瞬時を、或は、緊張感ある空気を感じながら至福のひと時楽しむ、どのような世の中になろうとも、時に五感を研ぎ澄ます席を持てたら身も心も癒されよう。皆さんのオアシスとなるでしょう。

茶道は世界の人々ともコミュニケーションに欠かせない文化人の教であり学ぶことが多い。その深さに終わりのない魅力を感じます。400年もの昔から脈々と受け継がれ、また未来にも繋げる責任を思いつつ、大河ドラマの一人になるのです。

2014年1月6日

発起人 小村晴美(第5期専攻科)

2016年初釜(記念写真)



お稽古風景① 初釜



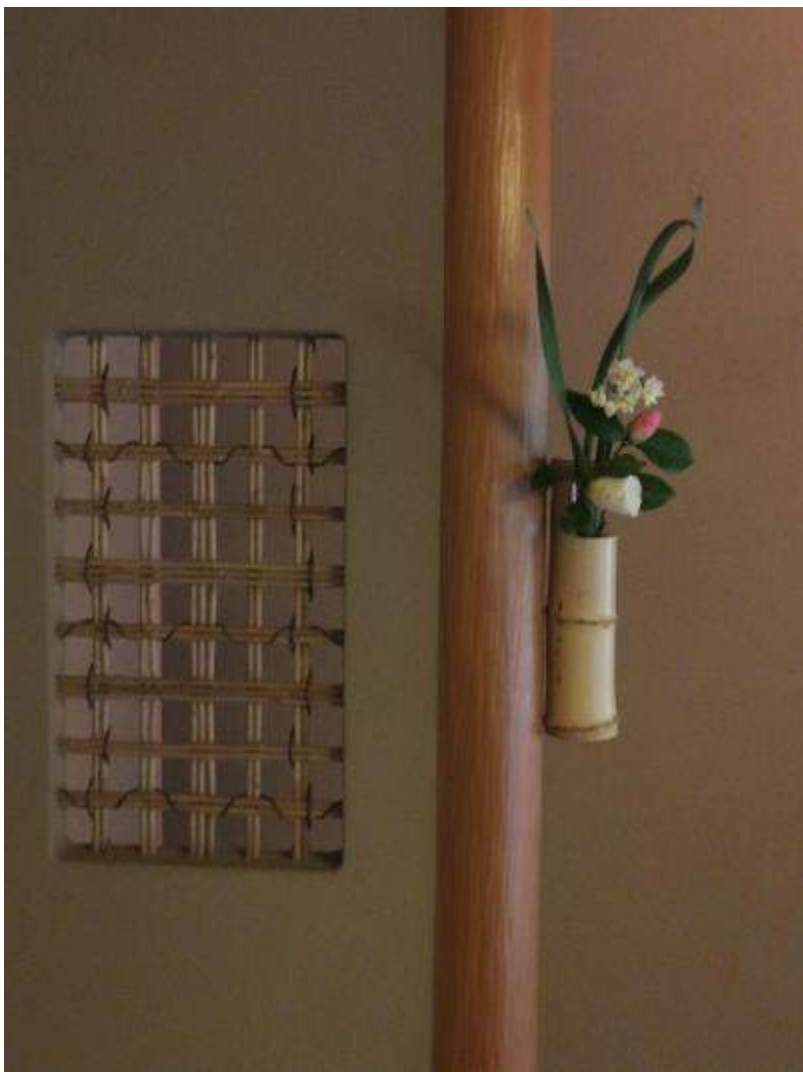
お稽古風景②



お稽古風景③



茶花 ①



茶花 ②



お稽古に使う目白庭園 ①



目白庭園の茶道具



茶釜



棗(ナツメ)

東京国立博物館の見学会

2015年3月31日



見学後は、満開のサクラの中を散策。
続いて、東天紅でランチ。



おわりに

高齢者となっても茶の湯に親しんでいるが、400年の歴史で「茶の湯」から「茶道」へと成熟したこの世界もこれで良いのだろうかと疑問を持つ。

日本独特の伝統文化がぎっしりと詰まる「茶の湯」の世界こそ、自然と相まって心穏やかにして心豊かになる時空である。

殺伐とした話題の多い今だからこそ、すたれてはならないとの思いが常にあり、これからもRSSCの学友と共に、生きがいを持って「茶の湯」を極めていきたい。

(修了論文概要より抜粋)